



あいさつの達人

部長 大塚 俊明

「おはようございます！」

毎朝、校門前に元気な声が響いています。

4年生のSさんを中心とした有志の子どもたちが、登校してくる友だちや先生方にあいさつをしています。

Sさんが校門前に立つようになったのは、四月の中頃だったと記憶しています。はじめは一人で始めた活動でしたが、やがて数名の同級生が加わり、さらに今では2年生の数名も仲間入りしています。

校門前でSさんらのあいさつを受けた初等部生たちも、「おはようございます」と笑顔で呼応します。その姿からは、「私たちは共に生活する仲間だ」という素直な気持ちが伝わってきます。

6年生にもなると、あいさつを交わすことが少し気恥ずかしくなる年頃です。それでもKさんをはじめとして、素敵なあいさつができる最上級生が何人もいます。私自身も、子どもたちとそんな何気ないあいさつを交わすだけで、一日の活力が湧いてくるのですから不思議なものです。

子どもたちに「なぜ続けているの？」と尋ねると、口をそろえて「よく分からないけれど、気持ちがいいから」と答えます。私は、この言葉にあいさつの本質が表れているように思います。

あいさつは単なる生活の技術ではありません。あいさつは、「あなたを大切に思っています」という心のサインです。これは、相手に対して心を開



くということです。気持ちのよいあいさつを交わすと、不思議とお互いの心も温かくなります。

私も、こんな心の通い合いを自然につくり出せる子どもたちに、「あいさつの達人だね」と声をかけるようにしています。

実際に子どもたちの様子を見てみると、気持ちのよいあいさつには人を動かす力があることを感じます。一人の行動が周囲に広がり、学年を越えて仲間が増え、あいさつを交わす人の輪も少しずつ広がってきています。誰かに言われたからではなく、自ら始め、自分たちで続けているところに、この取組の価値があるように思います。

先日、6年生の代表委員であるHさん、Iさんと話をする機会がありました。学校をリードする立場にある二人も、下級生たちの取組に大いに刺激を受けているようでした。あいさつを単なる礼儀作法として身に付けるのではなく、相手を思う気持ちに支えられた日々の習慣として学校全体に広げていきたい——そんな頼もしい思いに触れることができました。

子どもたち自身の力で、互いを認め合い、そうした思いが行き交う心地よい学校をつくり上げていってほしいと思います。そして、校門前だけでなく、教室でも廊下でも、たくさんの「あいさつの達人」が活躍する学校であってほしいと願っています。

学校では水泳学習も始まりました。梅雨空の続く毎日ですが、子どもたちの元気なあいさつと笑顔が学校中を明るくしてくれています。

7月もどうぞよろしくお願いいたします。